

## 主語の前に位置する介詞句“在+場所”

豊 後 宏 記

The Prepositional Phrase “在+place” before the Subject

Hiroki Bungo

### 0. は じ め に

介詞句は、状語となる場合には動詞の前に置かれるのが普通である。ただし、『實用現代漢語語法』に、主語の前に置くことのできる状語のひとつとして介詞句が挙げられているように、<sup>1)</sup> 介詞の中には種類によって、主語の前に置くことのできるものもある。場所を表示する介詞句“在+場所”(PP)も主語の前に置くことができる。

1 在家里他喝点儿酒。PP+NP+VP (以下 A 式とする)

2 他在家裡喝点儿酒。NP+PP+VP (以下 B 式とする)

『實用現代漢語語法』が、主語の前に置かれる介詞句の例文全てに“在”を用いた文を挙げているように、“在”はこの種の介詞の典型的なもののひとつであろう。<sup>2)</sup>

しかし、介詞“在”が論じられる場合には、介詞句が動詞句に前置される PP+VP と後置される VP+PP の違いのみに重点が置かれ、A 式と B 式は、B 式を常態として PP+VP の中に一括されることがほとんどである。例えば、『現代漢語八百詞』の「動作の発生または事物が存在する場所を指す。“在”は動詞・形容詞または主語の前に置く。」という説明などは、そうした傾向を反映したものと言える。

このような傾向は「場合によっては主語を省略してもよい」という中国語の性質とも関係があらう。主語が省略された場合、A 式と B 式は構造上の差異を失い、両者の判別はつかなくなってしまう。しかし、VP+PP の場合は、たとえ主語を省略したとしても、そのような変化は生じない。こうした見方をすれば、確かに、PP が主語の前後どちらに置かれようと、さして問題はないと考えることもできるだろう。また、そうであるなら、A 式と B 式は単に恣意的に使い分けられているに過ぎないと言えるかもしれない。

しかし、A 式と B 式とは、文が成立するための条件に大きな違いがある。范 1982 は、A 式に現れる動詞やその目的語は一定の制約を受けているという。すなわち A 式の文では、未然を表す場合の他動詞を除けば、動詞は副詞や助詞、他の動詞などと結合しない所謂「はだか動詞」であってはならず、また目的語も単純な形の名詞ではなく、その前に数量詞を伴ったものでなければならない、というのである。<sup>3)</sup>

3-a \*在黑板上他写字。

b 在黑板上他写了几个字。

c 在黑板上他写了个名字。

c 在黑板上他写个名字。

B 式にはこうした面倒な制約はない。にもかかわらず、なお B 式と A 式が併用されているのは、やはりそれなりの理由があつてのことであろう。たとえその差異がごくわずかなもので

あるとしても、特に小説などの文学的テキストなどを読み解く際には、両者の違いは重要な問題となつてこよう。本稿では先行研究を参考にしつつ、A 式における問題点を整理し、若干の考察を加えてみたい。

## 1. 范 1982

『實用現代漢語語法』では介詞句を、主語の前に置くことのできる状語のひとつとして、包括的に説明している。

- 1) 状語の働きを特に強調する
- 2) 状語が前の文を受け継ぐ
- 3) ふたつ以上の文節を修飾する
- 4) 異なる時や条件で発生するできごとを対比・列挙する
- 5) 状語の構造が比較的複雑であるか、音節が多い

しかし、このような説明ではいささか問題が生じてくる。例えば、

4-a 他今天喝酒。 b 今天他喝酒。

5-a 他在家里喝酒。 b \*在家里他喝酒。

4 では a→b の変換が可能であるが、0. で示した范 1982 の「動詞・目的語に対する制約」に従えば、5 の a→b は成立せず、説明 1 では A 式を包括しきれないし、説明 5 のような場合でも“在～，他喝酒。”は成立しない。また、単独の文を扱う場合には、説明 1・3・4・5 と説明 2 の区別はつかないのである。

以上のような点から考えると、『實用現代漢語語法』のような包括的なとらえかたではなく、“在”に対する特定の定義が必要になる。

范 1982 は、「A 式は現実に大量に存在しており、注目に値する文法現象も多い」として、A 式と B 式を明瞭に区別し、両者の差異を積極的に明らかにしようとしている点では注目すべき論文である。とは言え、その論点にはいまだ不明瞭な点もあって、直ちには納得しかねる。とりあえずは以下に、A 式と B 式に対する范 1982 の定義を挙げてみよう。

### 1.1. 范 1982 の定義

- 1) 構造的には、A 式の PP は外層構造であり、B 式の PP は内層構造である。

未然を表す場合、両者には構文上の差異はない。しかし進行を表す場合には、A 式の動詞が必ず副詞や助詞を必要とするのに対し、B 式は必要としない。これは、B 式の“在”が、介詞の“在”と進行を表示する副詞の“在”の合体したものである。<sup>4)</sup> A 式から介詞構造を取り除いてもアスペクトには影響ないが、B 式から介詞構造を取り除くと、アスペクトを変化させる。<sup>5)</sup> よって、A 式は主述構造全体を修飾する最外層構造で、

PP + (NP + VP)

と表すことができ、B 式は動詞構造に属し、動詞を拡張するから、

NP + (PP + VP)

と表すことができる。

- 2) 発音の上では、A 式は介詞構造の後にポーズを置くことができるが、B 式はできない。
- 3) 意味的には、A 式の PP は「出来事がおこる場所」を指し、B 式の PP は「動作が発生する、あるいは状態が出現・存在する場所」を指す。

定義 1 によれば A 式は外層構造で、PP は後ろの主述構造すべてを修飾しており、B 式は内層構造で、PP は後ろの VP を修飾している。こうした構造上の差異が、意味にも反映されている。

## 1.2. 范 1982 の問題点

范 1982 の定義において最も重視されているのは定義 1 であり、定義 3 も基本的には定義 1 に基づいている。確かに **PP + (NP + VP)** という、定義 1 の式は成立する。しかし、これをそのまま意味的レベルに移しかえて、**PP** と **NP + VP** の関係を修飾関係と捉えることが果たして妥当なのであろうか。

范 1982 は「出来事」と「動作」の違いについて、**A 式**の **PP** は構造上ふたつ以上の主述構造を修飾することができる、という面から論証しようとする。つまり、**A 式**の **PP** は外層構造であるから、

**PP + [(NP1 + VP1) + (NP2 + VP2) + ……]**

という構造をもつことが可能であるとして、以下のような例文を示す。

6-a 在上海，我考进了大学，他参加了工作。

(上海で、私は大学に入学し、彼は仕事についた。)

b 我在上海考进了大学，他参加了工作。

7-a 在院子里，爷爷在乘凉，妈妈在洗菜。

(庭で、父は涼をとっており、母は野菜を洗っている。)

b 爷爷在院子里乘凉，妈妈在洗菜。

6-a の「私が大学に入学した」「彼が仕事についた」というふたつの出来事はどちらも上海でおこっているが、6-b では「彼が仕事についた」場所のはっきりしない。7-b も同様に、「母が野菜を洗っている」場所がどこなのか知ることはできない。つまり、**A 式**の **PP** はふたつ以上の出来事の共通する場所となることができるのであり、したがって、後ろの主述構造全てに関わって「出来事のおこる場所」を表すが、**B 式**の **PP** は述語構造のみに関わり、「動作が発生する、あるいは状態が出現・存在する場所」しか表さない、というのである。<sup>6)</sup>

これは 1. に挙げた『实用現代漢語語法』説明 3) に述べられているケースであるが、『实用現代漢語語法』は、状語がふたつ以上の文節を修飾する場合には、状語を主語の前に置いてもよい、と指摘しているだけで、これが絶対条件とは言っていない。だから、共通する主語が連続して現れ、表現が多少くどくなるのを厭わなければ、6-a は次のようにも言える。

6-a' 在上海我考进了大学，在上海他参加了工作。

また、この文は容易に、次のように変換することもできる。

6-b' 我在上海考进了大学，他在上海参加了工作。

こうした、分配法則が成り立つ以上、6-a は 6-b' に変換できると看做することも可能であろう。そしてその場合、両者は、状語が強調されているかどうかといった、『实用現代漢語語法』の説明 1) 以上の違いは提示できないのではなかろうか。

范 1982 は **A 式**と **B 式**の間にかかなりの場合、構造的な互換性があることを指摘しながら、両者の互換性、非互換性をあまり問題にしていないようである。先に挙げられている例などは、複文という言葉ば特殊な構造であり、もし両者の差異を検討するなら、もっと単純な構造から始めるべきであろう。

## 2. 互換性

### 2.1. その他の状語との関係

周 1997 は、范 1982 の定義を全面的に受け入れて論を展開しているため、文脈を問題にしている点を除いては、さほど注目すべき発展は見られない。**A 式**と **B 式**の互換性については、多少の注意を向けているものの、具体的な事例を示すことに終始し、総合的な分析に欠ける。例

えば、PP とともに副詞・助動詞・接続詞・形容詞が文中で状語となる場合について、以下の  
ような例文を挙げている。

- 8-a 他不在学校吃饭。(彼は学校で食事しない。)
- b 她一向在海里游泳。(彼女はずっと海で泳いでいる。)
- c 你应该在学校住宿。(君は学校に寄宿すべきだ。)
- d 一阵凉风，却飒拉拉地，在殿外回旋不去。  
(しかし、一陣の涼風が、さらさらと、宮殿の外でつむじ風をつくっている。)
- e 他们连孩子带大人都一天到晚在街上找生意。  
(彼らは、子供から大人まで、朝から晩まで街で仕事を探している。)
- 9-a 他在家不做作业。(彼は家で宿題をしない。)
- b 他在交叉路口又看见那辆桑塔纳了。  
(彼は交差点でまたあのサンタナを目にした。)
- c 你在家应该干点家务。(君は家で家事をすべきだ。)

周 1997 は、8 のグループは A 式に変換できないが、9 のグループは文脈を考慮しなければ変換できると指摘する。<sup>7)</sup> その主な理由としては単に、主語と PP の間にその他の状語がないからだとするのみで、それ以上の分析はなされていない。しかし、A 式と B 式の差異を考える上で、この状語による構造的な互換性・非互換性の問題は、検討してみる必要がある。

## 2.2. 否定の副詞“不”

否定の副詞“不”は、PP+VP の状語としては、最も出現頻度の高いもののひとつであろう。  
周 1997 もその冒頭で、A 式の典型的な例として以下のような例文を挙げている。

- 10 在家里他不喝酒。(家で彼は酒を飲まない。)

10 は当然 B 式と互換性を持つ。しかし“不”を取り去ると、范 1982 が指摘する動詞の制約によって A 式は成立せず、B 式のみ有効な文となる。

- 11 他在家里喝酒。(彼は家で酒を飲む。)

B 式に状語を付加する場合、周 1997 に示されているように、状語は PP の前と VP の前のどちらに置くことも可能である。副詞“不”もいずれの位置にも置ける。ただしその場合、両者の表す意味には違いがでてくる。この問題について詳しく論じたものに相原 1990 がある。相原 1990 を参考にすれば、11 の否定文は以下のような違いを示すことになる。

- 12-a 他不<sub>1</sub>在家里喝酒。(彼は、家で酒を飲まない。——どこか他所で飲む)
- b 他<sub>2</sub>在家里不<sub>2</sub>喝酒。(彼は家では、酒を飲まない。——酒以外のものを飲む)

今、仮に前者をタイプⅠ、後者をタイプⅡとしておく。上に示したように、この両者が伝えようとしている情報は異なっている。訳文では分かりやすくするためにわざと読点を施したが、タイプⅠで問題にされているのは「どこでそれをするのか」ということであり、12-a を取敢て意識するなら「酒を飲むのは家ではない」と答えているのである。タイプⅡで問題にされているのは「そこで何を<sub>2</sub>するのか」ということであり、12-b は、「家では、酒を飲まない」と答えていることになる。では、なぜこのような違いが生ずるのであろうか。

針谷 2000 は、“不”“没/没有”“都”“也”といった副詞が文構造を決定する働きを持っていることに着目し、これらの副詞が介詞句の前にくると(タイプⅠ)、情報の焦点は PP に置かれるが、介詞句の後にくると(タイプⅡおよび A 式)、情報の焦点は VP に置かれ、PP は主題的に場や範囲を設定する、と説明する。また、後者の場合、“在”が動詞的な意味(いる・ある)を残しているときにはタイプⅡになるとも指摘している。針谷 2000 は、豊富な例文を示して詳細な分析を行っており、充分な説得力を持つものである。ただし、論点は PP が副詞とともに

用いられた場合のみに限定され、最終的には、ある種の副詞が文構造を決定する働きを持つという結論を導くものであって、A 式と B 式自体の差異を明らかにしようとしたものではないようである。

それでは、PP 以外に状語を伴わない単純な構造ではどうなるのか。例えば、文末に語気助詞“吗”を置く当否疑問文、

13 他在家里喝酒吗？（彼は家で酒を飲みますか。）

に対し、肯定する場合には 11 で答えればよいが、否定する場合には質問者の意図を読み取って、12-a・b のいずれかの答えを選択しなければならない。正反疑問文ならば、

14-a 他在不在家里喝酒？（彼は、家で酒を飲むのですか。）→ 12-a

b 他在家里喝不喝酒？（彼は家では、酒を飲むのですか。）→ 12-b

肯定の場合、いずれも 11 で答えられるが、否定の場合には答え方は限定されてくる。とするならば、副詞によって構造が決定される以前に、すでに 11 の中にふたつの情報の焦点が混在していることになる。

情報の焦点が置かれるものは、不確定であり、質問の対象となる。

15-a 他在哪儿喝酒？（彼はどこで酒を飲むのですか。）

b 他在家里喝什么？（彼は家で酒を飲むのですか。）

情報の焦点が PP にあるならば、VP は確定情報となり、VP にあるならば、PP が確定情報となるのである。

15-a・b のような二種類の疑問文が想定される以上、B 式は同時にふたつの確定情報を内包しており、状語が付加されるか、あるいは文脈的な関係の中で読み取られる場合に限って、いずれかの確定情報が顕在化すると考えられる。また A 式は、確定情報である PP を B 式の中から取り出し、これを文頭に置くことにより、確定情報を顕在化させた構造だと考えられよう。さらに言えば、B 式の PP は主語の後ろに在るため、なお主語の拘束を受けるが、A 式の PP は主語の前に置かれることにより、主語の拘束を免れることが可能になるのである。

### 3. PP と NP + VP

#### 3.1. 主 題

針谷 2000 は、タイプ II や VP が副詞を伴う場合の A 式において、PP は「主題的に場や範囲を設定する（傍線筆者）」と定義した。戴 1975 も、漠然とした指摘ではあるが、主語の前の PP は、語感の上では「主題」のようであると述べている。<sup>8)</sup> 范 1982 はこの戴 1975 の見方に反論し、「主題」というのは既知の情報であるから、語感的には「説明」と捉えるほうがずっと近いとして、<sup>9)</sup> 以下のような例を挙げる。

16 昨天我买了几张国画，很满意。在书房里，我挂了一幅“踏雪寻梅”；在卧室里，我挂了两幅花卉。

（きのう私は中国画を何枚か買って、たいそう満足した。書斎には、「踏雪尋梅」を掛け、寝室には二幅の花の絵を掛けた。）

17 你讲给我们听听。——在这儿我不讲。

（僕たちにちょっと聞かせてくれよ。——ここじゃあ言わないよ。）

范 1982 は、これらの場所（“书房里”“卧室里”“这儿”）を全て、未知の新しい情報だと看做している。

しかし、16 では“昨天我买了几张国画，很满意。”とあるのだから、文脈的な連続性が発生し、

“书房”“卧室”は“他的书房”“他的卧室”といった既知の情報となり得る。また、17は会話の場における発言であり、“这儿”も会話を行っている当事者たちにとっては、既知の情報としてとらえられているはずである。未知の情報というならば、以下のような例を挙げなければならないだろう。

18 \*在某一个地方，人人不喝茶。

18は“某一个”という不定数量詞により、明らかに不自然な表現で、以下のように表現すべきであろう。

18' 有某一个地方，人人不喝茶。(ある地方では、人々はお茶を飲まない。)

A式において、PPは確定条件であり、NP+VPが情報の焦点となっている。こうした関係は、「話し手が主語として選ぶのは、彼が最も関心を持っている主題であり、述語は選定された主題に対する叙述である」(朱1982)という言葉を想起させる。ただし、中国語における主語についていまだ明確な定義は存在していないにしても、“在”介詞句を直ちに主語と看做すことは、現段階では無理であろう。今はとりあえず、表現的レベルでは主語的な性格を持っているという意味で、A式のPPを主題と看做し、NP+VPは主題であるPPを叙述するものとして捉えておくに留める。

范1982の、主題は既知のものであるべきだという反論に対しては、18・18'にA式のPPが未知の場所を目的語にとらない例を挙げたが、さらに今ひとつ別の例を示しておく。

19 \*在哪儿，他喝点儿酒？

「彼はどこで酒を飲むのですか」と聞きたいときには、15-aのように問うべきであり、19は成立しない。

### 3.2. 動詞・目的語の制約

范1982の言う、A型における動詞・目的語に対する制約は、主題と叙述の関係から説明できよう。

B式には表現的レベルでは、PPが確定条件である場合と、VPが確定条件である場合とが混在していると言える。そして、状語や文脈などによって顕在化されない限りは、構造的には区別できない。つまりB式の内部では、「場所」から「動作・行為」に対する修飾の関係と、「場所」に対する「動作・行為」の叙述の関係が互いに牽制しあっている状態で成立している。その意味でB式は構造的にも安定しており、A式のような制約は発生しない。

ところがA式では、構造的にPPがNP+VPから独立し、叙述の関係が顕在化することになるため、PPが叙述成分であるNP+VPに対してより詳しい説明を求め、例えば把字式の動詞が制約を受けるように、動詞や目的語についての制約が発生するのではないだろうか。

## 4. A式の発生

A式は、五四以降の資料にはごく普通に見られる構造である。ただ、ごく古い資料、例えば『儒林外史』や『紅樓夢』などではA式は見かけないようである。

中国語では主語の内容が明白な場合には、主語は省略してもかまわない。というよりもむしろ、中国語の文章に主語が頻繁に用いられるようになってくるのは欧文の影響による、と指摘されているように、<sup>10)</sup> 本来中国語というのは日本語と同様、主語の頻出を嫌う傾向があって、誤解を生じない限りはわざわざ主語を表示しないのが普通であった。こうした面から考えると、ひとつの可能性として、主語表示の一般化とともに、B式における確定条件のPPがそれ以前よりも強く意識されるようになり、その結果として、PPを明確な確定条件として示すA式が

発生したとも考えられよう。

しかし、また別の見方もできる。

もともと中国語には、場所詞を文頭に置く構造が存在している。こうした構造について『實用現代漢語語法』は、「述語中に介詞句以外のかかなり複雑な状態を描写する状語があるときには、介詞を含まない場所詞は主語の前に置かなければならない」と説明し、<sup>11)</sup> 以下のような例文を挙げている。

20 院子里 孩子们你追我赶地玩着。

(庭では、子供たちが後になり先になりして遊んでいる。)

21 池塘旁边 一群白鹅一跛一跛地迈着方步。

(池の堤のそばでは、一群のガチョウが、よたよたした足どりで歩いている。)

“院子里”“池塘旁边”のどちらも、前に“在”を置けばA式になる。実際にはこのような構造のほうが、介詞句を用いたA式などよりも普通だったようであり、『儒林外史』や『紅樓夢』の中にも見出すことができる。

22 背后三四个妇女嘻嘻笑笑跟着。『儒林外史』33回

(背後には三四人の女が嬌声をあげながらついて来ています。)

23 地下婆娘丫鬟站满。『紅樓夢』22回

(下手の土間には婆やや女中らがずらりと立ち並んでおります。)

22は“嘻嘻笑笑”という「複雑な状態を描写する状語」を伴っているから、主語の前に置かれた“背后”は、『實用現代漢語語法』の説明の該当例となろう。

現代中国文の介詞の使い方は、古いタイプのものに比べて、煩瑣に感じられる。周 1997 には次のような例文が挙げられている。

24 她只在心里哭。(彼女は心の中で泣くばかりである。)

“心里”のような語句に“在”をつけるのはややくどい。古くは次のように表現されるだけであった。

25 宝钗心里也知道。便只一笑不肯说。『紅樓夢』22回

(宝釵は心中では勘づいたものの、ちょっと笑っただけで、あえて申しません。)

私見では、欧文の影響によって主語が用いられる頻度が増したように、欧文の前置詞用法から影響を受けて介詞使用の頻度が増し、主語の前の場所詞に“在”を用いることが一般化した結果、A式が発生した可能性があるのではないかと考えている。場所詞を主語の前に置くという構造が、場所を主題としてNP+VPが叙述するというA式の本来の形だったのかもしれない。勿論これは、現段階ではなお推測の域を出ず、中国語の欧文受容の状況と照らしあわせつつ、諸資料の詳しい検討が必要であるから、今は仮説として提示するに留める。

## 5. お わ り に

以下、本稿での考察を簡単にまとめておく。

表現的レベルにおいてB式：NP+PP+VPは、PPがVPを修飾し、またVPがPPを叙述するといった相反する性格を内包しており、双方が互いに牽制することで安定しているが、他の状語が付加されるか文脈の中で読み取られる場合には、いずれかの性格が顕在化する。A式：PP+NP+VPは、PPが主語の前に置かれることにより、「PP=主題／NP+VP=叙述」という構造が明らかになる。また、主題と叙述という関係から、動詞やその目的語に種々の制約が生じるのである。

なお、以上の点を前提にしたとき、PP+VP と VP+PP の関係をどう捉えるべきか、また、歴史的に見て A 式がいかなる経緯によって発生したのかといった問題については、今後の課題としたい。

## 注

- 1) 第三編第四章第三節三“既可以在主语前也可以在主语后出现的状语(主要是限制性的状语)「主語の前にも後ろにも現れることのできる状語(主に制限性の状語)」として、(一)時間を表す語、(二)多くの介詞句、(三)語気を表す副詞、(四)ごくまれな描写性の状語、を挙げる。「多くの“多数的”」とあるが、主語の前後に置くことができる介詞句の全てが、本稿で述べるような“在”と同様の性質を持つものと看做することができるかどうかは、また別問題であり、本稿では、ただ“在”のみに限って議論している。
- 2) 同注 1。介詞“在”は目的語として、場所の他に時間・範囲や条件などを表す語をとることもできるが、場所と範囲についてはどう区別するのが難しい。本稿 1. に、『実用現代漢語語法』が説明している、状語が主語の前に置かれる五つのケースを挙げたが、“在”の例文に見える目的語は、1 “他” “家里”、2 “这些事实面前”、3 “实践中” “中国共产党的领导下”、4 “业务上”、5 “我上大学的前一天”。このうち明確に場所と言いつけるのは“家里”だけである。范 1982 や周 1997 は、“电话里” “心里”なども議論の対象としているが、こうしたやや抽象的な場所については、場所と範囲の境界が不明なので、本稿では出来るだけ具体的な場所を扱った。
- 3) 范 1982 は動詞については、“光杆形式(bare form)”とする。名詞については“单纯的宾语名词”としか述べられていないが、これも「はだか名詞」のことを指していると考えてよいだろう。ただ、“在车上你同售票员。(バスの中で車掌に聞けよ。)”という例文が挙げられているので、合成語ならば可能ということになる。
- 4) 范 1982 は B 式の“在”は、介詞“在”と動作の進行を表す副詞“在”が合体したものだとして規定している。  
他在看书(彼は本を読んでいる) + 在里屋(奥の部屋にいる)  
⇒ 他在在里屋 ⇒ 他在里屋看书(彼は奥の部屋で本を読んでいる)
- 5) 注 4 の例文は同時に「彼は奥の部屋で本を読む」という未然の意味にも取れるし、已然を表す場合には B 式でも助詞の助けが必要になる。PP+(NP+VP) の証明にわざわざアスペクトを持ち出す必要があるのかどうか疑問である。
- 6) 朱 1981 は主語を問題にせず、PP+VP+NP と NP+VP+PP と存現文の互換性を問題にし、PP+VP+NP ⇒ (把)+NP+VP+PP という変換が可能なもの、不可能なものに分類する。  
A1・在床上躺着 ⇒ 躺在床上 A2・在旁边笑 ⇒ 笑在旁边  
そして、A1 の PP は人か物がいる(ある)位置を表し、A2 の PP は出来事のおこる場所を表すとする。これに対して范 1982 は“小明把字写在桌上。(明ちゃんは机で字を書く／書いている。)”という例文を挙げて、この文は“小明在桌上写字。”と変換できるが、通常は人“小明”は“桌子前面”に座っているものであり、物“字”も“纸上”に書かれるのであって、実際にはそこ“桌上”にいる(ある)わけではなく、意味内容と客観的な現実(人は机の前に座って紙に字を書く)の拘束を受けて成立することができるのだ、と反論している。しかし、范 1982 のこの反論は不完全なままで終わってしまい、結局は自己の主張を繰り返すのみである。朱 1981 は、動作者や受動者の位置に気をとられすぎているきらいがあるが、まず考えるべきなのは、やはり PP と VP の関係であろう。
- 7) 周 1997 は他に、“他惊慌地在屋里走来走去。”、“那个警察在雪地上结结实实地摔了一交。”も PP を主語の前に出せる例として挙げているが、“地”によって構成される状語は、PP の前後どちらに置いても意味の上で変化は生じないので除外した。また、“刘燕在心里暗笑。”の PP は主語の前に置けないとも言いが、“暗笑”は既にひとつの動詞と看做すべきであって、「はだか動詞」の制約によって不可能なのである。
- 8) Tai, James H-Y 1975. “On two functions of place adverbials in Mandarin Chinese” JCL [中国语言学报] 3.2/3. 筆者未見、范 1982 に依る。“在中国人人都有工作(中国では誰もが仕事についている)”を英文訳 “It is true in China that everyone has a job” と比較して「主題」のようだと指摘しているのだが、范 1982 は逆に、ごく自然に “is true” が加えられている点から、「説明」の性格が明らかであると述べている。
- 9) 「説明」は原文では“表述”となっており、あるいは「叙述」と訳すべきかとも思われるが、“陈述(叙述)”と区別する意味で「説明」としておいた。



主語の前に位置する介詞句“在+場所”

10) 大原 1973 参照。

11) 第三編第四章第三節・“只能位于主语前的状语「主語の前のみに置ける状語」”

参 考 文 献

『実用現代漢語語法』, 刘月华他, 1983, 外语教学与研究出版社。

『現代漢語八百詞増訂本』, 吕叔湘主編, 2000, 商务印书馆。

范继淹 1982. 「论介词短语“在+处所”」, 『语言研究』第1期。

周小兵 1995. 「表示处所的“在”字结构」, 『中国语言学报』第八期。

相原茂 1990. 「場所を表す“在NP”——否定における特殊性」, 『中国語』内山書店, 10月号。

針谷壮一 2000. 「福祉との語順からみた介詞“在”」, 『中国言語文化論叢』第3集。

朱德熙 1981 「在黑板上写字」及相关句式, 『语言教学与研究』第1期。

朱德熙 1982 『语法讲义』, 商务印书馆。

—平成14年9月30日 受理—